

『百科全書』項目「デカルト主義」の デカルト哲学批判と啓蒙のイデオロギー

La critique de la philosophie cartésienne dans l'article CARTÉSISANISME de l'*Encyclopédie* et l'idéologie des Lumières

井田 尚
Hisashi IDA

はじめに：デカルトの哲学と「デカルト哲学」の違い

十八世紀において、デカルト哲学ほど激しい盛衰を経験した哲学体系もないだろう。なお、ここで言う「哲学体系」としての「デカルト哲学」とは、『方法序説』（1637）をはじめとした個々の著作に見られるデカルトの思想の全体に限らず、デカルトの衣鉢を継いだマルブランシュら、いわゆるデカルト主義者達によるデカルトの哲学の祖述・再解釈、あるいはカトリック教会や大学などの公的権威によるデカルトの哲学のイデオロギー的な再利用を含む、便宜上の概念である。

アリストテレスやデカルトのように後世への影響力が大きい哲学者になればなるほど、原典に記された本人の思想と、学派の門弟や崇拜者によって再構成された「哲学体系」との間にずれが生じるのは、むしろ自然だろう。そして、個人の哲学が、しばしばエピゴーネンの手になる単純化や通俗化を被りながら「哲学体系」として後世に流布され、哲学史に多くの頁を占めるに至るのも、もはや歴史的な必然と言ってよい。

ある哲学者の思想を本当に知りたければ、哲学史に満足せず本人の著作を、できれば原典で読む他ない、というつまらない結論にもなりかねないが、本論の趣旨は、デカルトの哲学をテキストに内在的に読み解くことではなく、デカルトの哲学が、啓蒙思想が勃興した十七世紀末から十八世紀前半にかけて、『百科全書』をめぐる言論界のイデオロギー闘争の中で、いかに多様な思惑を持つ党派・集団の毀誉褒貶に晒され、それぞれの文脈でいかに都合よく回収されたかに焦点を当てることにある。

1. デカルト哲学の変貌：禁制思想から「新哲学」、そして保守的な公認哲学へ

合理主義哲学、近世哲学の創始者として不滅の足跡を残した偉人という後世に作られたデカルト像からすると意外だが、フランス本国におけるデカルト哲学の受容のプロセスは、当初から非常に起伏に富んだものだった。生前、長く滞在したオランダで論敵による執拗な迫害を受けたデカルトの著作と哲学は、1650年の本人の死後、レギウス、クレルスリエ、ロオーら弟子筋に当たるカルテジアンによって続々刊行・紹介され、デカルト哲学は祖国フランスで「新哲学」としてもはやされるようになる。ところが、1663年にデカルトの著作は早くも禁書に指定され、1670年代から1690年代にかけて、デカルト主義とジャンセニスムを大学や修道会で議論することが、王令によって禁止されてしまう。異端として断罪された宗派ジャンセニスムとひとくくりになされていることから分かるように、デカルト主義は、正統カトリックの教義を脅かす危険思想として狙い撃ちにされた訳である¹。『方法序説』（1637）にも定義されたデカルトの方法的懐疑がスコラ学の権威にもたらした破壊的な打撃を思えば、キリスト教会と王権が警戒心を強めたのも当然であろう。しかし、逆に言えば、当局が禁圧に踏み切ることを余儀なくされた事実そのものが、デカルトの「新哲学」がもたらす変革への熱望と期待が当時の先進的知識人の間でいかに高まりつつあったかを裏付けている面もある。

デカルト哲学に対する逆風が十七世紀末まで吹き続ける中で、アドリアン・バイエによる『デカルト氏の生涯』（Adrien Baillet, *La vie de monsieur Descartes*, 1691）は、偉人としてのデカルト像を十八世紀に伝承することで、デカルト哲学がアリストテレス哲学に代わる新たな権威としてフランスの学問界に受け入れられる上で、少なからぬ貢献を果たした。バイエ自身、神学者であり、その周辺にも資料提供によって側面支援したり、バイエによる伝記の執筆に期待を寄せたりするデカルト派の聖職者がいたことから²、公的権力による言論弾圧にもかかわらず、デカルト哲学がいかに教会の一部の知識層の間でさえ密かな支持を集めつつあったかが窺い知れる。パリ王立科学アカデミー終身書記を務めることになるフォントネルがコペルニクスの地動説とデカルトの渦動説に基づいて執筆した対話形式の科学啓蒙書『宇宙の複数性に関する対話』（1686年初版）が人気を博したことは、自然科学の領域におけるデカルト哲学の「公認」を示す出来事となった。

¹ 山口信夫、『疎まれし者デカルト 十八世紀フランスにおけるデカルト神話の生成と展開』、世界思想社、2004年、pp. 7-8, 88-89.

² 山田弘明、「ライブニッツから見たバイエ『要約・デカルト氏の生涯』」、『中部哲学会年報』、50号、2019年、p. 6. (具体的な人物としては、ルグラン神父、ポワソン神父の名が挙げられている。)

II. 『百科全書』項目「デカルト主義」に見るデカルト評価

十七世紀末から十八世紀にかけてデカルトが徐々に受け入れられて偉人としての評価を高める中で、バイエの『デカルト氏の生涯』やデカルト本人による『方法序説』を入りにデカルト氏の生涯と思想に親しんだフランスの十八世紀人も多かったはずだ。実際に、デカルトの哲学を紹介した『百科全書』の項目「デカルト主義 CARTÉSIANISME」（ペストレ神父、ダランベール執筆）においても、両書は主要な典拠として参照・引用されている。以下では、ペストレ神父による本体部分とダランベールによる補遺とからなる項目「デカルト主義」の記述を分析することで、百科全書派によるデカルト評価の要点と特徴を浮き彫りにしたい。

II. 1 項目「デカルト主義」（ペストレ神父の執筆部分）：

「人」と「作品（思想）」からなる哲学史的叙述

ペストレ神父の執筆部分は、デカルトの伝記的事実とデカルトの哲学の紹介のいわば二部構成になっている。

家庭環境と生い立ち、哲学教育に幻滅し数学に熱中したラ・フレーシュ学院での日々、午前は寢床で考え事をして過ごした長年の生活習慣、兵役と旅に多くの時を費やした青年期・壮年期からスウェーデンでの客死に至るデカルトの生涯を簡潔に紹介した冒頭の伝記的記述の典拠への項目内での参照指示は、「*Mém. de littérat. tom. 31*」（『文学回想録』第31巻）という略号による素っ気ないものである。この明示的な参照指示の題名は正確ではなく、実際には、ジャン＝ピエール・ニスロン『文芸共和国の著名人の歴史に役立つ回想録・彼らの著作のカタログ・レゾネ付き』の第31巻、項目「ルネ・デカルト」が典拠となっている³。出版地がパリ、刊行元が『百科全書』の版元の四書店のひとつブリアソン書店であるところを見ると、場合によっては書店側から提供を受け、『百科全書』の人物関連項目の伝記部分を執筆する際になどに便利な参考資料として重宝したのかもしれない。

『百科全書』の項目が、百科全書派の執筆協力者の書き下ろしによるオリジナルな「作品」であるというのは、少なからず幻想である。現代の『百科全書』研究では、項目中に典故が明記された「明示的典拠」、項目中に参照支持を伴わない「非明示的典拠」の違いを問わず、項目の本文テキストのどこまでが執筆協力者本人による文章なのかを、まずは疑ってかかるのが常識となりつつある。『百科全書』はそもそも、各種アカデミー紀要の学術情報をはじめとする、全ての分野の人間知識の集成としての性格も担っていた⁴。1751年から

³ Jean-Pierre Nicéron, *Mémoires pour servir à l'histoire des hommes illustres dans la république des lettres avec un catalogue raisonné de leurs ouvrages*, Paris, Briasson, tome XXXI, 1735, pp. 274-292.

⁴ *Encyclopédie*, Art. ENCYCLOPÉDIE, pp. 635b-636a.

1765年の15年間に、第7巻までは毎年1巻ずつ、発禁処分を受けて秘密裡に準備された残りの10巻分を含め、最終的に単純計算にして、本文全17巻を年平均1巻以上のペースで世に送り出した『百科全書』の出版計画に照らしても、ディドロ、ダランベールら執筆陣が、先行辞典類など参考文献を手近に用意し、しばしば自筆の文章の合間にそれらからの引用を挿入する、あるいは大量の引用を自筆の文章でつなぐ編集・加工によって項目を量産した、と考えた方がむしろ自然だろう。

筆者がかつてダランベールの力学・物理学項目における引用典拠の特定作業によって裏付けたこともあるこのいわば「省エネ執筆法」の痕跡は、『百科全書』項目「デカルト主義」のペストレ神父による執筆部分にも如実に見受けられる⁵。ジャン＝ピエール・ニスロンの『文芸共和国の著名人の歴史に役立つ回想録…』(以下、『回想録』と省略する)のデカルトの項目の記述が、これ以上いじり様がないほど簡にして要を得た内容ということもあるが、項目「デカルト主義」の冒頭部分は、途中の省略や文頭の表現の書き換えなど微細な違いを除き、ほとんどが同書からの忠実な引用となっている。

だが、この事実をもってペストレ神父の怠慢を責めるよりは、むしろ情報源に利用されたニスロンの『回想録』の出来の良さをこそ褒めるべきだろう。哲学者デカルトの生涯が、そのまま百科事典の項目に流用できるほど読みやすく明快な伝記のスタイルに落とし込まれたニスロンの実用に徹したこなれた記述からは、1730年代において既に、デカルトが『回想録』の正式題名にも見られる「著名人」(« des hommes illustres »)の仲間入りを堂々と果たし、「偉人」として世間に認知されていた時代背景までが読み取れる。

『百科全書』項目「デカルト主義」でペストレ神父は、偉人デカルトの伝記的事実を紹介したこの冒頭部分に続いて、デカルト哲学の概要の説明へと議論を進めている。哲学者の「生涯」に続いてその「思想」を紹介する記述のスタイルは、第3巻以降ディドロが担当した、総称して「古今の哲学史」と呼ばれる哲学項目群にも通底する。

20世紀後半に文学作品を作者や社会から自立した意味構造を持つテキストとして論じるロラン・バルトらの新批評(ヌーヴェル＝クリティーク)が華やかに登場して以来、十九世紀以来のフランス文学史の王道とも言える、「人」と「作品」を因果関係で結びつけるギュスターヴ・ランソンらの実証主義的な批評・研究のスタイルが俄かに否定され、色褪せて見えた時代もあった。

しかし、ある作家・思想家の人物像からその作品・思想へと無理なく理解を進める叙述の

⁵ 筆者は以前、『百科全書』におけるダランベールの1600近い執筆項目の典拠をつきとめる作業に取り組んだことがある。大項目や自らの学問的・党派的信条に関わる重要な項目や哲学的考察には、むろん自筆の文章も多いが、実に多くの項目で、ダランベールが下敷きとして英国のチェンバーズ百科事典やミュッセンブルークの物理学入門書などが、いわゆる「コピー & ペースト」同然の形で利用されていることを確認した。具体的には以下を参照のこと。逸見龍生・小関武史編『百科全書の時空 典拠・生成・転位』, 法政大学出版社, 2018年, 第6章「『百科全書』の制作工程——ダランベールと引用の系譜学」(井田尚), pp. 137-167.

流れは、現代の百科辞典類においても未だに踏襲されていることから分かるように、予備知識に乏しい一般読者の学習を想定した場合、教育面・実用面での効果が高く、辞書の項目にはまことにうってつけである⁶。哲学者の人物像から個々の作品や思想の概要へと読者を誘導するこうした哲学史の叙述のフォーマットは、『百科全書』以前から哲学辞典などの専門辞典にはそれなりに存在したが、近代的な百科辞典の項目の定型フォーマットとしての確立にあたって『百科全書』が果たした貢献は、決して少なくないだろう⁷。

II. 2 「コピー & ペースト」の「編集意図」を敢えて問う：

ペストレ神父の執筆部分から浮かび上がるイデオロギー的傾向

こうして哲学史の叙述のフォーマットに沿って、デカルト氏の生涯からデカルトの主要作品とデカルト哲学の概要の紹介へと話題を転じたペストレ神父が、そこで新たな典拠に使用しているのは、本文中でも参照指示されているアントワヌ・プリューシュの『天空史』（1740年第2版）第2巻⁸とアドリアン・バイエの『デカルト氏の生涯』（1791）である⁹。もっとも、本文中に参照指示があるとは言っても、プリューシュの『天空史』に関しては、題名が辛うじて二箇所出典として示されているので引用との推測がつくが、バイエの『デカルト氏の生涯』に至っては、項目末尾に「これら全てについては、A・バイエの『デカルト氏の生涯』でより詳細に参照されたし¹⁰」との断り書きがあるのみで、バイエの著作を参考文献に利用したという一般的な参照指示にしか見えない。ところが、項目「デカルト主義」本文テキストの典拠を文章単位で絞り込む作業を試みた結果、デカルトの著作と思想の概要を説明した部分も、ほとんどがプリューシュ『天空史』とバイエ『デカルト氏の生涯』からの

⁶ 一般読者が知らない作家や作品について百科辞典で調べて基礎知識を得ると、専門家が作家に関するある程度の予備知識を暗黙の前提としつつ、特定の作品などを批評的・審美的な見地から論じるのとは、むしろ次元の異なる話だが、前者において実用性が優先されるべきなもの、また明らかであろう。哲学史、文学史、百科辞典に共通するこの「人」と「作品」という叙述のスタイルには、生物を類や種などの人為的概念に基づいて定義する博物学・生物学の分類法にも似て、初学者の学習や記憶の効率を高めるそれなりの利点がある。博物学者ビュフォンは、リンネのそれを含めた生物学・植物学の分類法の恣意性を手厳しく批判したが、それは人為的な分類概念と自然そのものの混同を戒めるためであって、学習者に対する分類法の教育的効果そのものは認めていた。あらゆる学問分野の知識の啓蒙を目指した『百科全書』においても、そうした読者の「読みやすさ」と「学習効果」への配慮が不可欠であったのは言うまでもない。

⁷ たとえば、デイドロが「古今の哲学史」の哲学項目群の執筆に際して種本に利用したヤーコプ・ブルッカーの『哲学の批判的歴史』（全5巻、1742-44）やプルー・テランドの『批判的哲学史』（1737）にも、哲学者の「生涯」から「思想」へと順を追って紹介する叙述のスタイルが見られる。

⁸ Antoine Pluche, *Histoire du ciel où l'on recherche l'origine de l'idolatrie, et les méprises sur la formation des corps célestes*, seconde édition, Paris, chez la Veuve Estienne, 1740, tome second, pp. 173-186, 187, 189-190, 212-213, 215-223, 226, 256-258, 282-283. (引用箇所の特定には、第2版を使用した。)

⁹ Adrien Baillet, *La Vie de Monsieur Des-Cartes*, Paris, chez Daniel Horthémels, 1691, Première Partie, p. 25, 132-134; Seconde Partie, pp. 99-101, 107-110, 113-114, 289-290, 393-395, 503-5, 506-508, 529.

¹⁰ *Encyclopédie*, t. II, Art. CARTÉSIANISME, *Philosophie de Descartes*, p. 725b.

引用であることが判明した（詳細な調査結果については脚注8、9および下記の表を参照のこと）。この結果を踏まえて、『百科全書』項目「デカルト主義」のテキスト構成と典拠を以下に示してみよう。

『百科全書』項目「デカルト主義」のテキスト構成および典拠

頁数	テキスト	典拠
716a-717a	セクション1：哲学者デカルトの生涯 « René Descartes... dans l'église de Ste Genevieve du mon. <i>Mem. de Littérat. tom. 31.</i> »	Jean-Pierre Nicéron, <i>Mémoires pour servir à l'histoire des hommes illustres dans la république des lettres avec un catalogue raisonné de leurs ouvrages</i> , Paris, Briasson, tome XXXI, 1735, pp. 274-292.
717a-719b	セクション2：デカルト哲学の功績、『方法序説』の概要、デカルトの方法とその欠点 « Quoique Galilée, ... qu'il y a du Géometre au Physicien. <i>Hist. du Ciel, tome II.</i> »	Antoine Pluche, <i>Histoire du ciel où l'on recherche l'origine de l'idolatrie, et les méprises sur la formation des corps célestes</i> , seconde édition, Paris, chez la Veuve Estienne, 1740, tome second, pp. 173-186, 187, 189-190, 212-213. (引用箇所の特定には、第2版を使用した。)
719b-722b	セクション3：デカルトの道德思想およびデカルトの形而上学（『省察』の概要） « Quoique M. Descartes ... le chemin qu'il a suivi pour la découvrir. »	Adrien Baillet, <i>La Vie de Monsieur Des-Cartes</i> , Paris, chez Daniel Horthémels, 1691, Première Partie, p. 25, 132-134; Seconde Partie, pp. 99-101, 107-110, 113-114, 529.
722b-724a	セクション4：『光論』に見るデカルトの宇宙論とその限界 « Descartes, dans son <i>Traité de la Lumiere</i> ... qu'il se trouve de pieces différentes dans la machine entiere. »	Antoine Pluche, <i>ibid.</i> , pp. 215-223, 226, 256-258.
724a-725b	セクション5：デカルトの『情念論』の概要およびキリスト者デカルトの擁護 « M. Descartes composa un petit <i>traité des passions</i> ...	Adrien Baillet, <i>ibid.</i> , pp. 289-290, 393-395, 503-5, 506-508.

ここまでの典拠調査でも明らかのように、本文のほとんどが参考文献からのいわば「コピー & ペースト」によって編集された項目「デカルト主義」について、執筆協力者のペストレ神父の個人的な執筆意図を問うてもあまり意味がないかもしれない。しかし、たとえ項目本文のほとんどが他人の著作からの引用であるにせよ、無色透明の編集方針というものはあり得ない以上、典拠となる参考文献の選別、項目の論理構成に合わせた引用文の取捨選択とつなぎ方などには、執筆意図に準じた「編集意図」が介在していると考えられる。さらに、単独の項目だけではそうした執筆者の「編集意図」を問うのが難しく見える場合でも、典拠に使用された参考文献が執筆された思想的・宗教的な背景や文脈まで考慮に入れば、項目を構成する言説のイデオロギー的傾向をある程度炙り出すことはできるだろう。

そこで、先の表にまとめた典拠調査の結果も踏まえ、以下に項目「デカルト主義」本文テ

キストの主な論点をセクション毎に抽出し、項目全体の議論の流れを整理してみよう。

哲学者デカルトの生涯を略述した「セクション1」（典拠：ニスロン『回想録』）は、デカルトの生涯に関する一見当たり障りのない伝記的事実を紹介しただけに見えるが、項目末尾をよく読むと、客死先のスウェーデンで女王クリスティーナがデカルトのためにそれなりに盛大な葬儀を行って大理石の廟を建立しようとしたのをシャニユ氏が押しとどめた結果、カトリックの慣習に従って孤児施療院の墓地に質素に葬られたデカルトの亡骸が、財務官ダリベール氏の手配によって1666年にストックホルムからパリへと運ばれ、1667年6月24日にサント＝ジュヌヴィエーヴ・デュ・モン教会に盛大に葬られたとの内容が目を引く。死後、当初はカトリック教会による冷淡な扱いを受けたかにも見えるデカルトの亡骸がフランスに「凱旋」し、哲学を一新した偉人にふさわしくパリのカトリック修道院に手厚く葬られたとの記述は、1650年から1660年代後半にかけてのデカルトの「偉人化」の進行を物語るとともに、フランスにおけるデカルト哲学とカトリック信仰の「和解」を暗示するものと言えなくもない。

デカルト哲学の功績、『方法序説』の概要、デカルトの方法とその欠点を論じた「セクション2」（典拠：プリューシュ神父『天空史』）で、ペストレ神父（プリューシュ神父）は、スコラ学の空虚を示し、フランスおよび近隣諸国の自然科学研究を盛んにしたデカルトの哲学に十八世紀人がいかに多くのものを負うかを強調し、『方法序説』でデカルトが提唱した「方法」の概要を紹介した上で、幾何学の原理を自然の全体に適用し、経験の役割を無視して、ひたすら事物の観念的な定義からその特性を導き出そうとした点などをデカルトの合理的方法の欠点として指摘している。ここには、旧弊なスコラ学を一掃して哲学と自然科学に新境地を切り開いた偉人デカルトに対する敬意とナショナリズム的な礼賛に留まらず、経験論哲学と経験的観察に基づく自然科学が切り開く輝かしい学問の進歩と未来に期待を寄せる十八世紀の知識人らしい自負も窺えよう。

続いて、デカルトの道徳思想およびデカルトの形而上学（『省察』の概要）を紹介した「セクション3」（典拠：バイエ『デカルト氏の生涯』）では、論敵による懐疑論者、無神論者といった言いがかりに閉口したデカルトが道徳に関する著作の出版を断念するとともに、私生活においては神や隣人と折り合いよく暮らし、世に広く受け入れられている最も蓋然的で中庸な見解に従い、自分の力が及ばない外的な善や運命に一喜一憂しないことを幸福の秘訣としたこと、デカルトが『省察』で神の存在と人間の靈魂の非物質性、精神と身体の違いまでは証明したが、靈魂の不死を証明するつもりまではなかったことなどが紹介されている。この一節は、個人としてのデカルトがキリスト教信仰や社会通念を敬う常識人であったこと、そして、デカルト哲学の心身二元論がキリスト教の靈魂不滅説と決して矛盾しないことをアピールする内容と言える。

さらに、『光論』に見るデカルトの宇宙論とその限界を論じた「セクション4」（典拠：プ

リューシュ神父『天空史』)では、新たな推論の技術を考案し諸科学に幾何学の正確さをもたらしたデカルトの功績は認めたと、デカルトの宇宙論の要となる渦動説、光を隣接し合う微粒子として説明する光線論および真空嫌悪の概念が、いずれも謬説として斥けられ、デカルトに限られた力学の法則だけで、神が創造・設計した多様な自然の営みの全てを説明しようとしたのは早計であったとされている。また、デカルトの宇宙論の論拠に持ち出される「連続的創造」の概念も、天地創造に際して、あらゆる場合を見越して被造物とその運動を保存するための一般法則(自然法則)を定めた神の意志の崇高な単一性と矛盾する仮説として一蹴されている¹¹。

ここでは、限られた幾何学の原理と力学の法則によって自然の営みの複雑な全体を説明しようとしたデカルトの「勇み足」が批判されているが、その論調は、聖書およびキリスト教の教義と科学知識の調和を求める引用元のプリューシュ神父の護教論的な意図を色濃く反映したものである。

最後に、デカルトの『情念論』の概要を説明し、キリスト者デカルトを擁護する内容の「セクション5」(典拠:バイエ『デカルト氏の生涯』)では、人間の身体は機械であり、人間の靈魂に属するのは情念を含む観念だけなので、心を乱す情念の性質を知り、情念の力を手懐けられるように導くことが哲学の務めである、とのデカルトの考えが紹介されている。そして、このセクションを締め括るのは、ヴォエティウスら論敵が、神を敬ったデカルトを無神論者・懐疑論者呼ばわりしたのは破廉恥な誹謗中傷に過ぎず、デカルトの『省察』や『哲学原理』を読んだ者でキリスト教徒から無神論者になった者が一人もいないどころか、無神論者からキリスト教徒に改宗した者さえいることを訴える文章である。

『情念論』の概要を除くこのセクションの主な役割は、やはり、無神論や懐疑論に対する論駁を口実にしてデカルトの「不信心」を非難する論敵達の卑劣な攻撃に対し、デカルトを敬虔なキリスト教徒として擁護しようとする点にある。

以上、引用された典拠の違いに基づいて五つのセクションに分割した項目「デカルト主義」の内容は、1)既にニュートン物理学が席卷しつつあった十八世紀前半のフランスにおける自国最頂の心情も反映した偉人デカルトの哲学的功績の再評価と、主として宇宙論など自然学の領域におけるその哲学体系の誤謬の批判、2)心身二元論に基づくデカルトの形而上学とキリスト教の教義の無矛盾性とデカルトの個人的な信仰心の擁護、という二つの要素に集約することができるだろう。つまり、項目「デカルト主義」のペストレ神父による執筆部分は、十八世紀前半の啓蒙的な科学知識と護教論的な意図に基づいてデカルトの方法と自

¹¹ 「連続的創造」とは、時間中での自然の生成変化を説明するために、神が一瞬毎に新たに世界を再創造し続けているとする仮説である。『省察』でデカルトが唱えたとされる連続的創造の概念の伝統的解釈に見られる非時間的な「創造」の原因作用と時間的な「生成」の原因作用との混同については、以下の文献を参照のこと。吉田健太郎「デカルトと連続創造説-作動原因のデカルト的解釈に向けて-」、『愛知教育大学研究報告』, 第49号, 2000, pp. 33-41.

然学の功罪を問い直す議論と、『省察』や『哲学原理』などにおける心身二元論などの形而上学的な議論やデカルト本人の信仰心を擁護する議論とが綯い交ぜになっている点に特徴がある。そして、強いて言うならば、その折衷的な論理構成と、典拠からの「コピー & ペースト」に徹する黒子的な役割にこそ、盟友イヴォン神父やド・ブラド神父とともにリベラルな聖職者として知られたバストレ神父の「編集意図」を見て取ることもできるだろう¹²。それは、度々検閲制度の犠牲になった『百科全書』の項目でカトリック教会の開明的な聖職者に許されるぎりぎりの自己主張と言い換えることもできるかもしれない。

II. 3 項目「デカルト主義」（ダランベールの加筆部分）

ダランベールによる加筆部分は、デカルトが学問にもたらした恩恵と数々の誤謬、デカルトの後継者達について知ることができる『百科全書』の様々な項目や有益な文献、フランスにおけるデカルト哲学の苦難に満ちた受容の歴史を読者に紹介するとともに、デカルト本人の哲学とその門徒達の哲学的見解の違い、(自然学の観察・実験などの)素材に恵まれない時代にもかかわらず壮大な哲学体系を築き、世間の偏見や無知と闘ったデカルトの偉大さを改めて評価する内容の注釈となっている。以下でその具体的な議論を確認してみよう。

ダランベールは、冒頭の段落でデカルトに多くを負う数学・物理学・哲学の概念を扱った『百科全書』の代表的な項目の数々とマルブランシュ、ロオー、レギウスらデカルトの後継者を紹介し、ヴィユモ『惑星の運動の新たな説明』（1707）を、最初にして最良の渦動説擁護論として挙げている。

続く段落では、逍遙学派哲学（アリストテレス哲学）の支配が続いたフランスで禁圧の危機に晒されながらデカルト哲学がようやく浸透した頃にはニュートン哲学に取って代わられようとしていたにもかかわらず、フランスの多くの大学やアカデミーがデカルト哲学に執着したこと、18年ほど前からフランスにもニュートン主義者が登場して支持を増やし、今ではフランスの全てのアカデミーがニュートン哲学を支持し、英国哲学を公然と教えるパリ大学の教授までいることが紹介されている。なお、段落末尾には、「項目「引力 ATTRACTION」を参照せよ。そして、デカルトとデカルト主義者については『百科全書』「序文」を参照せよ」との指示が見られる。

第三段落では、偉大な哲学者デカルトは首尾一貫した思考の持ち主であったのに、デカルトの門徒の大半が師の見解の密接な連関を無視してその一部だけをばらばらに採り入れたこ

¹² バストレ神父は、「ベーコン主義あるいはベーコンの哲学 BACONISME OU PHILOSOPHIE DE BACON」、「カンパネラ CAMPANELLE」、「カルダノ（ブルーノ） CARDAN」など九つの項目を『百科全書』に提供したが、執筆協力者のひとりド・ブラド神父がソルボンヌ大学に提出した博士論文が教皇、フランスの高位聖職者および高等法院によって異端として断罪された、いわゆるド・ブラド事件後は項目の執筆を控えた (Frank A. Kafker, « Notices sur les auteurs des dix-sept volumes de « discours » de l'Encyclopédie », in *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, 1990, vol. 8, No. 1, p. 110.)

と、デカルト本人は絶対運動の存在を否定し延長と物質を同一視したのに、デカルト主義者達の多くは絶対運動の存在を信じたこと、デカルトの動物機械論は人間の靈魂が精神的かつ不死な存在であるとの考えを後押しするものであり、この点に関してデカルトと意見を異にする者達も、動物靈魂なる考えに対する異議の数々がキリスト教徒の哲学者にとって重大なのは認めるべきこと、デカルトが時代と素材に恵まれなかったのは惜まれることが指摘されている。

そして、項目末尾の段落には、無知と偏見に闘いを挑んでデカルトが受けた迫害は、同じ勇気を持って同じ苦難の道を歩む者達にとって慰めとなるに違いないとの考察が見られる¹³。

以上のダランベールによる加筆部分は、デカルトが数学・物理学・哲学の分野で果たした偉大な知的革新の足跡を称える一方で、渦動説を代表とするデカルトの自然学の見解については、既にニュートン哲学・物理学によって乗り越えられた過去の仮説として位置付け、ニュートン哲学・物理学がアカデミーの大半や大学の一部を征服しつつある現状において、デカルト本人と言うよりは、デカルトの門徒を自称する者達が唱えるデカルト哲学が、いわゆる「抵抗勢力」が護持する保守的な哲学体系に墮したことを読者に印象付けるものと言える。

科学の進歩によって時代遅れとなったデカルト哲学・自然学を金科玉条のごとく奉じ、ニュートン哲学の制覇を「害悪」(« mal ») と捉える一部の勢力を遠回りに皮肉りつつ、迫害を恐れず偏見と無知に果敢に挑んだ偉人デカルトの勇気を、同じ境遇に置かれた後世の知識人の慰めとして称えるダランベールの言葉には、やはり、当時の最新の科学理論たるニュートン物理学へのアカデミシャンとしての積極的な肩入れに加え、百科全書派のフィロゾフにふさわしい矜持が窺える。

II. 4 項目「デカルト主義」の言説構成：

ペストレ神父とダランベールの論調の違い

以上のように論点の分析を試みた『百科全書』項目「デカルト主義」の全体としての言説構成を振り返ると、ペストレ神父の執筆部分もダランベールの執筆部分も、自然学との関連を中心としたデカルト哲学の功績と誤謬を歴史的な視点から平等に評価している点で共通するが、ペストレ神父の議論は、心身二元論をはじめとするデカルトの形而上学とカトリックのキリスト教との無矛盾を論証し、デカルト哲学をキリスト教会の教義に適った「良き哲学」として印象付けることにより力点が置かれている¹⁴。それに対し、ダランベールの加筆

¹³ *Encyclopédie*, t. 2, Art. CARTÉSISANISME, *Philosophie de Descartes*, pp. 725b-726a.

¹⁴ マリアフランカ・スバラツァーニによれば、項目「デカルト主義」においてペストレ神父は、哲学において、デカルトが理性と信仰、精神と身体との区別を守りながら、自由な精神で真理を探求しようとした点を強調すると

部分は、自然学の発展とニュートン物理学の隆盛によって歴史的に乗り越えられつつあるデカルトの哲学体系が、保守的・反動的な一部の社会集団によって温存され、デカルト本人の意図を裏切るかのように、自然の探究に基づく科学の発展と言論の自由を妨げる偏見と無知の温床と化した「知的墮落」を科学者・フィロゾフの立場から批判することを狙いのひとつとしている。

開明的な神学者とはいえカトリック教会に所属するペストレ神父が、(あくまでも典拠からの引用に基づいて) デカルト哲学を「良き哲学」として擁護するかに見えるのは、禁欲的に自己主張を抑えて「合法的」な言説を紡ぐ検閲対策のアリバイ作りというよりは、いわゆる「コピー & ペースト」の手法で先行文献の内容を継ぎ接ぎする安直な項目執筆法によるものと思いたくなるが¹⁵、引用箇所や文脈を取捨選択し、複数の引用をつなぎ合わせてひとつの文章に加工する段階で、執筆意図に準ずる「編集意図」が介入するというのが筆者の見解である。

いずれにしても、十八世紀半ばには既にカトリック教会側に取り込まれつつあったデカルト哲学を「良き哲学」として追認し、信の領域に関わるデカルトの形而上学に一定の敬意を示す一方で、自然学にはほぼ領域を限定してデカルトの哲学体系の誤謬を忌憚なく指摘する論理展開は、デカルトの動物靈魂論を巡る賛否両論を承知しつつ、靈魂が人間のみにも備わるとする「キリスト教徒の哲学者」への配慮を見せるダランベールの加筆部分にも通じる。項目全体としては、同じデカルト哲学でも形而上学と自然学との間に微妙な線引きをして、心身二元論に基づくデカルト形而上学を「良き哲学」として敬しつつ、自然学の領域では、ニュートン物理学など最新の科学的知見に基づいてデカルトの渦動説や光線論などを過去の誤った科学的見解として斥ける、言ってみれば無難な言説構成になっていることが分かる。

以下では、『百科全書』におけるデカルト関連項目の「表玄関」とも言える項目「デカルト主義」のこのいわば「合法的」な論理構成と、デカルト関連のその他の項目の論理構成との間にどのような共通点や違いが見られるのかについて、項目「デカルト主義」でペストレ神父とダランベールが参照指示している項目群を対象を絞って検討してみよう。

もに、デカルトの道德哲学に関しては、バイエに倣って、自己の探求と中庸な判断に基づくデカルトの合理的かつ信仰にも適った賢慮を称賛している。(Mariafranca Spallanzani, *L'Arbre et le labyrinthe -- Descartes selon l'ordre des Lumières*, Honoré Champion, 2009, pp. 102-103.)

¹⁵ ジョン・ラフによれば、『百科全書』の最初の7巻におけるイヴォン神父、ペストレ神父、デイドロらによる哲学項目は、1750年代から60年代にかけて、正統カトリックの著述家達の批判の集中砲火を浴びたが、これらの項目の大半はオリジナリティーに欠け、ヤーコブ・ブルッカー『哲学の批判的歴史』(1742-44)をはじめとする無数の典拠の内容を寄せ集めたものだった。(John Lough, *The Encyclopédie*, Genève, Slatkine Reprints, 1989, p. 146.)

III. 1 項目「デカルト主義」(ペストレ神父の執筆部分)の参照指示先：

イヴォン神父の執筆項目に見られる感覚論的主張の過激さ

項目「デカルト主義」のペストレ神父による執筆部分に見られる参照指示先の項目は、項目「代数学 ALGEBRE」(執筆者ダランベール)、「宇宙論 COSMOLOGIE」(執筆者ダランベール、フォルメー [資料提供])、「公理 AXIOME」(執筆者イヴォン神父)、「分析 ANALYSE」(執筆者イヴォン神父)、「光行差 ABERRATION」(執筆者ダランベール)である¹⁶。

一見して分かるように、ペストレ神父が参照を指示している項目は、ダランベールの執筆項目か、『百科全書』の哲学項目を共に執筆した盟友のイヴォン神父の執筆項目のいずれかである。この人選と参照指示先の項目の顔ぶれからは、デカルトの数学における偉大な功績と哲学・自然学における誤謬とを比較衡量しつつデカルト主義の功罪を問い直そうとするペストレ神父の「執筆意図」が予感される。

まずダランベールの執筆項目から見てみよう。項目「代数学 ALGEBRE」では、グア・ド・マルヴェース神父の『パリ王立科学アカデミー年誌・論集』(1741年号)掲載論文を主な典拠に、数字や多項式の積の表記法、乗数や虚数の平方根の概念を代数学にもたらしたこと、4次方程式の2次方程式への因数分解などを解析に導入したこと、解析の幾何学への応用によって解析幾何学を創始し、曲線を変数方程式によって定義する方法を考案したことなどが、数学史に残るデカルトの画期的な業績として紹介されている¹⁷。

ル・モニエの『天文学入門』を典拠とする天文学項目「光行差 ABERRATION」では、光の速度が有限であるために、地球の公転などによる観測者の位置の変化に伴って天体の見える方向がずれる現象を指す光行差の発見の歴史と光行差の計測方法などが専門的な見地から説明されているが、デカルトへの言及は見られない¹⁸。

項目「宇宙論 COSMOLOGIE」は、サミュエル・フォルメーが『百科全書』に提供した原稿を典拠に宇宙論を、現在の地球を支配する一般法則の発見を目指す合理的な自然学として定義し、ヴォルフからモーペルチュイに至る宇宙論の系譜を紹介する内容だが、ここにもデカルトへの言及は見られない¹⁹。

一方、「公理 AXIOME」(執筆者イヴォン神父)では、様々な学問において生得観念や原初的真理と混同されて来た公理が、人間精神の外部に实在の対象を持たず、何ら新たな発見に結びつかない論理的・形而上学的な抽象観念として斥けられている²⁰。イヴォン神父の項目

¹⁶ 参照指示先がそれなりに多いので、項目単位の見出し語の原綴照合の煩瑣を避けるために、本論では、本文中の各項目名の表記を項目「デカルト主義」における参照指示の綴り(大文字の頭文字+スモールキャピタル)に統一する。

¹⁷ *Encyclopédie*, t. I, Art. ALGEBRE, p. 261a-262a.

¹⁸ *Encyclopédie*, t. 1, Art. ABERRATION, pp. 23b-25a.

¹⁹ *Encyclopédie*, t. IV, Art. COSMOLOGIE, pp. 294a-297b.

²⁰ *Encyclopédie*, t. I, Art. AXIOME, pp. 906b-907a.

は他の文献からの引き写しが多いことは、上述のようにジョン・ラフらによって指摘されているが、その点を割り引いても、デカルトが温存した生得観念をロック流の経験論の立場から完膚無きまでに批判するイヴォン神父の論理は、百科全書派の開明的な聖職者によるものと分かっている、当時の保守的な読者をたじろがせるに足る大胆なものであることが分かるだろう。

項目「分析 ANALYSE」（執筆者イヴォン神父）においても、複雑なものから単純なものへと向かい、命題や定義を引き出すための方法とされる論理学・スコラ学の分析の概念が否定され、分析とは、人間知識の起源に遡り、観念の生成を辿り直しながら観念を組み合わせたたり分解したりする方法なのであって、そのみが真理の発見に役立つとされている。そして、分析で得られ真理の探求の出発点としての単純観念を、デカルトらが思い込んだように生得観念や一般的原理と見なすと、事物の特性を発見するのに事物の定義から入る倒錯に陥らざるを得ないが、ロックやベイコンらは、感覚や反省に由来する個別的な原初的観念を単純観念と見なした、というイヴォン神父の議論には、やはり、経験論の立場から生得観念説を斥ける、項目「公理 AXIOME」と同じ挑発的な主張が見られる²¹。

こうして見ると、ペストレ神父による執筆部分で参照指示されるダランベールの執筆項目はいずれも、科学入門書や学術論文や情報提供者による資料など、各種参考文献から要点を巧みに抽出する編集技術に基づいて、デカルトの数学における歴史的偉業や天文学の概念や哲学的な宇宙論の系譜を一般読者に説明する、アカデミックでありながら啓蒙的な内容に共通点がある。

これに対し、ペストレ神父が参照指示する盟友イヴォン神父の執筆項目（項目 AXIOME、項目 ANALYSE）はいずれも、生得観念を公理や一般的原理と混同したことをデカルトらの非としつつ、感覚を起点に単純観念や複合観念の発生を説明するロック流の経験論を、真理の発見に役立つ真の方法として推奨する内容となっている。『百科全書』第1巻が刊行された十八世紀中葉には既にカトリック教会の「準公認学説」としてお墨付きを得ていたデカルト形而上学の核のひとつとも言える生得観念を正面から否定して、ロック流の経験論ないし、それを感覚一元論的に読み替えたコンディヤック流の感覚論に理があることを堂々と主張するその議論は、まがいなりにもカトリック教会の聖職者であったイヴォン神父の立場も考えると、やはり、相当過激なものと言わざるを得ない。その後、ド・プラド神父がソルボンヌ大学に提出した博士論文の感覚論的命題が異端思想として処罰された、いわゆるド・プラド事件で『百科全書』にも累が及んで刊行が一時中断に追い込まれたのも、これでは無理がないと妙に納得が行くほど、イヴォン神父によるデカルト主義批判と感覚論擁護の舌鋒は鋭く挑発的なのである。

²¹ *Encyclopédie*, t. I, Art. Analyse, pp. 401b-403a.

III. 2 項目「デカルト主義」(ダランベールの執筆部分)の参照指示先：

数学者デカルトの称揚とデカルト自然学の科学的批判

一方、項目「デカルト主義」の後半でダランベールが参照を指示しているのは、項目「代数学 ALGEBRE」、「方程式 EQUATION」、「曲線 COURBE」、「運動 MOUVEMENT」、「観念 IDEE」、「靈魂 AME」、「衝突 PERCUSSION」、「光線 LUMIERE」、「渦動 TOURBILLON」、「精妙な物質 MATIERE SUBTILE」、「マルブランシュ主義 MALEBRANCHISME」、「引力 ATTRACTION」、「動物靈魂 AME DES BÊTES」である²²。

先述の項目「代数学 ALGEBRE」²³、項目「方程式 EQUATION」(デカルトによる不定方程式の曲線への応用や、方程式の平方根に関するデカルトの定理を論じた他項目への参照指示あり)²⁴、項目「曲線 COURBE」(曲線を方程式で表現することで解析幾何学を基礎付けたデカルトの功績への言及あり)²⁵は、いずれもダランベールの執筆による数学項目であり、そこでは代数学、幾何学、解析幾何学における数学者デカルトの先見の明が純粋に学問的見地から称揚されている。

残る項目のうち、項目「運動 MOUVEMENT」(休止を運動の収束と見るデカルト一派の見解や、神が物体に付与した運動量は保存されるとのデカルト主義者達の主張への言及あり)²⁶、「衝突 PERCUSSION」(物体が衝突によって運動を互いに伝達する法則を発見したデカルトの功績と、物体の衝突の前後で運動の総量は等しいとするデカルト主義者達の誤解への言及あり)²⁷、「光線 LUMIERE」(光る物体の粒子の運動が極小の物質によって眼球の奥の繊維に瞬時に伝達されるとするデカルト一派の光線理論が誤謬として斥けられている)²⁸は、それぞれ力学、物理学、光学の項目で、いずれも執筆者はダランベールである。これらの項目は、力学・物理学の分野で運動量保存や衝突の法則を発見したデカルトの科学史上の偉業を称えるとともに、衝突する物体の運動量保存に関するデカルト主義者達の誤解を解き、粒子の瞬間的な衝突と運動で光の伝達を説明するデカルトの光線理論を科学的誤謬として斥ける内容である。

残る参照指示先は、項目「観念 IDEE」、「靈魂 AME」、「渦動 TOURBILLON」、「精妙な物質 MATIERE SUBTILE」、「マルブランシュ主義 MALEBRANCHISME」、「動物靈魂 AME DES BÊTES」である。

²² ペストレ神父による執筆部分と同様、参照先の項目が多いので、本文中での各項目の見出し語の表記は、項目「デカルト主義」における参照指示の表記に統一する。

²³ *Encyclopédie*, t. I, Art. ALGEBRE, pp. 259a-262a.

²⁴ *Encyclopédie*, t. V, Art. EQUATION, pp. 849b, 854a.

²⁵ *Encyclopédie*, t. IV, Art. COURBE, pp. 378ab, 381b, 384b, 386b, 387b, 388b.

²⁶ *Encyclopédie*, t. X, Art. MOUVEMENT, p. 832b.

²⁷ *Encyclopédie*, t. XII, Art. PERCUSSION, pp. 331b, 332b, 334a.

²⁸ *Encyclopédie*, t. IX, Art. LUMIERE, pp. 718ab, 719a, 722b.

項目「観念 IDEE」にデカルトへの直接の言及は見られないが、靈魂と観念の誕生を同時と見なす生得観念説が、人間の感覚の役割を無視した、経験に反する曖昧な空論として批判されている²⁹。項目「靈魂 AME」は、イヴォン神父による項目本体と（デイドロの印である）アステリスクがついた補遺とからなる。イヴォン神父の執筆部分にはデカルトへの言及は見られないが、デイドロは補遺の中で、靈魂の在り処をめぐる古今の哲学者・科学者の仮説を比較検討しつつ、靈魂が脳内の松果腺に宿るとするデカルトの見解を、解剖学的所見や実験に基づかない哲学的推論としている³⁰。

項目「渦動 TOURBILLON」は、英国のチェンバース百科事典の項目「渦動 VORTEX」の非明示的引用からなる項目の末尾にダランベールが解説を加えた構成になっている。項目全体を通じて、デカルトが天体の運行の原理とした渦動の概念では説明がつかない惑星の規則的な公転や楕円軌道、彗星の不規則かつ多方向の動きなど数々の反証とともに、いわゆる渦動説は、科学的精度においてニュートンの引力説にはるかに及ばない荒唐無稽な仮説として斥けられている³¹。また、項目「精妙な物質 MATIERE SUBTILE」においては、真空の存在を認めないデカルト主義者達が、あらゆる物体の細孔を通り抜けて空間に充満していると考えた精妙な物質なる概念が、物理に反した空想的仮説として否定されている³²。

項目「マルブランシュ主義 MALEBRANCHISME」では、デカルトの心身二元論を、心身を神の作用の二次的原因とみなす機会原因論によって読み替えるだけでなく、高速で回転する無数の微小な渦動の遠心力と圧力を宇宙の原動力とする自然学によってデカルトの渦動説に修正を加えたマルブランシュの議論の独創性や深みが称えられている³³。

項目「デカルト主義」のここまでの箇所に見られる参照指示に比べ、項目後半の二つの参照指示（「引力 ATTRACTION」、「動物靈魂 AME DES BÊTES」）は、やや趣が異なる。

まず、フランスにおけるデカルトの哲学の紆余曲折に満ちた受容の歴史を紹介しつつ段落末で項目「引力 ATTRACTION」の参照を支持するのは、文中にもある通り、デカルト哲学がフランスにおいてもニュートン自然学によって既に乗り越えられたことを強調するためである。項目「引力 ATTRACTION」の項目本文の大半は、英国のチェンバース百科事典の同名の項目およびミュッセンブルークの科学啓蒙書からの「コピー & ペースト」だが、項目末尾

²⁹ *Encyclopédie*, t. VIII, Art. IDÉE, pp. 489b-490a.

³⁰ *Encyclopédie*, t. I, Art. AME, pp. 340b-342a（直接デカルトの仮説に関係する重要箇所の範囲）。

逸見龍生は、『百科全書』項目「靈魂 AME」の補遺において、デイドロが靈魂の局在箇所をめぐる諸説々たる解釈を裏付ける複数の非明示的典拠を引用することで、言説を担う声と権威の主体を増殖させ、靈魂の局在箇所をめぐる問題系そのものを無効化とした可能性を指摘している。詳細については、以下の論文を参照のこと。Tatsuo HEMMI, « Les Références implicites dans le supplément éditorial de l'article AME de Diderot », *Recueil d'études sur l'Encyclopédie et les Lumières*, n° 1, mars 2012, pp.41-61.

³¹ *Encyclopédie*, t. XVI, Art. TOURBILLON, pp. 471a, 472b, 473ab.

³² *Encyclopédie*, t. X, Art. Matière subtile, p. 191a.

³³ *Encyclopédie*, t. IX, Art. MALEBRANCHISME ou philosophie de Malebranche, pp. 942b-943b.

にはダランベールの哲学的考察が付されている。その内容は、デカルトの渦動説をきっぱりと斥け、「隠された原因」に依拠しつつも天体の運行をはじめとする物理現象を矛盾なく説明できるニュートンの引力説を最も有力な仮説として積極的に支持するものである。ダランベールは同じ段落の末尾で、デカルトやデカルト学派に関して、自らが執筆した『百科全書』「序文」の参照も指示している³⁴。

次に、項目「デカルト主義」における最後の参照指示先となる項目「動物靈魂 AME DES BÊTES」で、執筆者のイヴォン神父は、「動物が靈魂を有するか否かという問いはキリスト教徒の哲学者にとって難問である」と断った上で、犬が喜怒哀楽の感情を持つことを知る我々人間の理性は、デカルトの動物機械論に反発を覚えるものであり、神が創られた動物の身体という機械の目的がそれ自体とは考えられないから、動物には機械の目的となる非物質的な原理たる靈魂が備わっているはずだ、との反論を寄せている³⁵。

この項目「動物靈魂 AME DES BÊTES」への参照支持の前後の箇所、ダランベールは、「デカルトの動物機械論は（人間の）靈魂の靈性と不死というキリスト教の教義に極めて好都合な見解であり、この点に関して意見を異にする者も、キリスト教信者の哲学者にとって、動物靈魂に対する数々の異議の存在が無視し難いほど大きいことは認めなければならない」とのコメントを付している。

項目「動物靈魂」においてイヴォン神父がデカルトの動物機械論に呈している異議は、項目本文中で用いられている「内心の確信」（« persuasion intime »）という表現からも分かるように、理論的な反論というよりは、日常経験と直感に基づいた心情的かつ倫理的な反発を表したものである³⁶。しかし、たとえその能力に限りがあろうとも動物に靈魂が存在するとのめかすことは、靈魂を人間の特権的な原理から動物的な原理に格下げすることに他ならず、靈魂を身体とは別個の実体・能力と見なすデカルトの心身二元論のみならず、人間の靈魂の靈性と不死というキリスト教の教義にも抵触しかねない。「動物が靈魂を有するか否かという問いはキリスト教徒の哲学者にとって難問である」とのイヴォン神父による前置きは、まさにこの間の事情を指している。

もっとも、動物靈魂に関するイヴォン神父の議論は、キリスト教の教義とも相性が良いデカルトの心身二元論に異を唱える点では大胆とはいえず、たとえば、人間を動物機械に類する、靈魂を持たざる機械として解釈するラ・メトリーの人間機械論のような一元論的唯物論とは、過激さの水準が全く異なる。その点では、項目「デカルト主義」の末尾で「この点に関して意見を異にする者も…」という断り書きで、デカルトの心身二元論、もしくは、そ

³⁴ *Encyclopédie*, t. I, Art. ATTRACTION, *attractio* ou *tractio*, pp. 853b-854a.

³⁵ *Encyclopédie*, t. I, Art. AME des Bêtes, pp. (343b-344b, 348b,) 351b-352a.

³⁶ *Ibid.*, 351b.

れによって正当化される靈魂の靈性と不死に関するキリスト教の教義と相容れない（唯物論などの）見解の持ち主の社会的存在をわざわざ顕在化させるダランベールの身振りの方が、ある意味ではより挑発的な面もあろう。

以上のように、項目「デカルト主義」のダランベールによる執筆部分で参照指示されている項目群（項目「代数学 ALGÈBRE」、「方程式 EQUATION」、「曲線 COURBE」、「運動 MOUVEMENT」、「観念 IDÉE」、「靈魂 ÂME」、「衝突 PERCUSSION」、「光線 LUMIÈRE」、「渦動 TOURBILLON」、「精妙な物質 MATIÈRE SUBTILE」、「マルブランシュ主義 MALLEBRANCHISME」、「引力 ATTRACTION」、「動物靈魂 ÂME DES BÊTES」）の大半は、数学および物理学におけるデカルトの先駆的な発見や業績を称賛するものか、もしくはデカルトの渦動説や光線理論などに見られる誤謬をその後の科学の進歩や発見によって得られた科学知識によって訂正・指摘する内容と言える。

一方で、ダランベールは、項目「観念 IDÉE」、「靈魂 ÂME」、「動物靈魂 ÂME DES BÊTES」など、人間の靈魂の問題を扱ったいくつかの項目の参照も指示している。主としてイヴォン神父の執筆になるそれらの項目においては、デカルトの心身二元論や動物機械論、デカルトが温存した生得観念説が陰に陽に批判されている。項目「靈魂 ÂME」および「動物靈魂 ÂME DES BÊTES」は、いずれも（人間の）靈魂の靈性と不死というキリスト教の教義の根幹に抵触しかねない重要項目であるため、さすがにデカルトの心身二元論に対する直接の批判の類は見られないが、項目「靈魂 ÂME」の補遺（執筆者デイドロ）では靈魂の在り処を脳の松果腺とするデカルトの仮説、ひいては靈魂をめぐる哲学的・科学的言説の権威が揺るがされたり、項目「動物靈魂 ÂME DES BÊTES」ではデカルトの動物機械論が日常経験を根拠に疑問に付されたりするなど、いくつもの挑発的な議論が仕掛けられていることが分かるだろう。

III. 3 保守的なダランベールと大胆なイヴォン神父の意外なコントラスト

こうして見てみると、項目「デカルト主義」の参照指示先の項目群において、ダランベールは、あくまでもキリスト教神学・形而上学とは切り離された知の領域としての数学および自然科学の枠内でデカルトの歴史的功績と科学的誤謬、換言すればデカルト主義がもたらした功罪を、科学者の立場から比較的公平に評価している印象が強い。それもそのはずで、ダランベールは元々、信仰の問題に抵触する可能性を恐れたためか、哲学項目に関しては数学者（数理科学者）としての立場からしか執筆協力をしない慎重さを見せており、ド・プラド事件以降は一層発言を控えるようになった³⁷。むろん、啓蒙主義者、ニュートン派としての時に露骨なまでの党派性がダランベールのデカルト評価に大きな影響を与えていることは言

³⁷ Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, Armand Colin, 1962, p. 153.

うまでもない。項目内で参照指示している『百科全書』「序文」で自ら述べているように³⁸、ダランベールにとってデカルトとは、同時代人の無理解と迫害に晒される流浪の生涯の中で独立不羈の精神と徹底した方法的懐疑によって旧態依然としたスコラ学の権威主義や偏見を打ち破り、来るべき知的革命を準備した偉人であり、啓蒙の合理主義的精神の孤高の先駆者なのである。

これに対し、項目「デカルト主義」の参照指示先の項目群でいずれも形而上学・論理学に関わる項目「公理 AXIOME」、「分析 ANALYSE」、「靈魂 AME」、「動物靈魂 AME DES BÊTES」の執筆を担当したイヴォン神父は、経験論・感覚論によって生得観念説を否定したかと思えば、動物機械論に基づくデカルトの心身二元論に疑問を呈して見せるなど、キリスト教神学・形而上学と人間知識との間に引かれた暗黙の境界線を時に侵犯しかねない大胆な議論を展開していることが分かるだろう。百科全書派の開明的な聖職者という知的背景をたとえ知っていても、聖職者の身でありながら感覚論を標榜し、キリスト教神学・形而上学とも結びついたデカルトの哲学的見解の数々に疑義を呈するイヴォン神父の批判は、ダランベールのそれよりもはるかに過激であり、当時の体制側にとってはより「危険」な言説であったに違いない。

この好対照ぶりは、ダランベールとイヴォン神父がそれぞれ執筆を分担した分類項目（大別すれば信仰とは一線を画した世俗の学問領域の科学とキリスト教の教義に抵触するリスクが高い形而上学・論理学）の性質の違いに由来するものとも言えるが、イデオロギー的に穏健なダランベールとより戦闘的なイヴォン神父の性格の違いを映し出すものとも言えよう。そして、項目「デカルト主義」におけるベストレ神父とダランベールによる執筆分担、さらには（主にダランベールとイヴォン神父の執筆になる）参照指示先の項目群の選別とネットワーク化が意図的に準備されたものだとすれば、デカルトの生涯と代表的な著作や哲学的見解を紹介した穏当な内容の項目「デカルト主義」を入り口として、科学の進歩の歴史におけるデカルト主義の功罪を問うダランベールの項目群、さらには生得観念や心身二元論をめぐるデカルトの形而上学的見解に鋭く切り込むイヴォン神父の項目群へと読者を段階的かつ分散的に誘導する項目の配置は、やはり検閲のリスクなども十分に意識した周到なものと言えるだろう。

結論

『百科全書』においてデカルトに関する最も重要な項目と言える「デカルト主義」は、ベ

³⁸ *Encyclopédie*, t. I, Discours préliminaire des éditeurs (D'Alembert), pp. xxv-xxvii.

ストレ神父による項目本体と、ダランベールによる解説部分とからなる。ニスロン『文芸共和国の著名人の歴史に役立つ回想録…』、ブリューシュ神父『天空史』およびバイエ『デカルト氏の生涯』からの巧みな引用のコラージュに基づくペストレ神父の執筆部分の言説構成が、哲学者デカルトの生涯と主著およびデカルトの「方法」の紹介と経験論的批判、キリスト者デカルトの擁護を特徴としているのに対し、項目末尾のダランベールによる解説部分は、科学の領域にデカルトおよびデカルト一派の影響をもたらした影響の功罪を問い直し、壮大な哲学体系を築いたデカルト本人の偉大さを再確認しつつ、スコラ学とアリストテレス哲学の伝統が根強かったフランスで浸透に時間を要したデカルト主義が、アカデミーから大学へと徐々に支配を広げつつあるニュートン主義に急速に取って代わられつつある現状をアピールしたものとなっている。

一方、項目「デカルト主義」で参照指示が行われている項目群は、ダランベールの執筆になる数学・物理学関連項目とイヴォン神父の執筆による形而上学・論理学関連項目に大別できる。それらの項目群で、ダランベールがデカルトの数学・物理学における先駆的発見の数々を称賛しつつ、デカルトの光粒子説や渦動説を科学的誤謬として斥け、ニュートンの引力説の優位性を印象付けようとしているとすれば、イヴォン神父は、デカルトが受け入れた生得観念の存在を経験論・感覚論の立場から否定し、人間の靈魂の靈性と不死というキリスト教の教義に好都合なデカルトの心身二元論や動物機械論に取って代えて疑義を呈する大胆な議論を試みている。

デカルト哲学およびデカルト自然学に対する批判の対象を科学的誤謬に限定したダランベールの議論には、神の存在に関する認識を司る信の領分と、自然に関する認識を司る知の領分とを截然と区別し、自然現象の究極的な原因も人間の認識能力を超えた問題とするダランベールの、良く言えば科学者・アカデミシャンとしての分を弁えた、悪く言えば保守的な姿勢が垣間見える。

それとある意味で対照的なのは、百科全書派の開明的な聖職者に分類されるとはいえ、れっきとしたカトリック教会の聖職者でありながら、経験論・感覚論の立場から生得観念を明確に否定し、キリスト教の教義にも適合するデカルトの心身二元論や動物機械論に疑念を示すイヴォン神父の先鋭的な議論である。キリスト教の教義への抵触がより懸念される形而上学・論理学の領域でデカルト哲学およびデカルト主義を批判することが「キリスト教徒の哲学者」にとっていかに危険なことでもあるかを知りながら、公刊書物でどこまでの表現が許されるかを試すかのように感覚論的主張を繰り広げるイヴォン神父の大胆さは、聖職者というその立場を考えれば無謀とも言える。

両者のデカルト批判にはこうした興味深い「温度差」も見られるとはいえ、カトリック教会の聖職者ペストレ神父と王立科学アカデミー・メンバーの科学者ダランベールが執筆を分担した項目「デカルト主義」を出発点に、参照指示先のダランベールとイヴォン神父の執筆

になる項目群で先人デカルトの偉大な功績だけでなく、デカルト一派がもたらした数々の誤謬や偏見をも列挙してデカルト主義の歴史的な総決算を行うかのような言説のリレーは、社会的な立場を超えて学問と科学の歴史的進歩を信じ、経験論（感覚論）、ニュートン自然学など最新の知見とイデオロギーを共有する百科全書派にふさわしい自己肯定、自己確認の言説と言えるだろう。